

日本応用藻類学会第13回大会 企画シンポジウム

遠藤吉三郎生誕140周年記念

～日本人は藻類をどのように認識してきたか～

海藻、淡水藻、藍藻など、地衣類を含む多様な藻類を食糧、薬（本草）、資源、神撰等として利用する民族植物学的な情報は、地球レベルで極めて多様である。とりわけ海藻利用に関する情報は、歴史的に日本人の生活文化の中に極めて多い。すなわち、日本人は、1,000年以上にわたって日本文化の基層をなす個性ある“藻の文化”を創造してきた。マイナーサブシステム（小生業）としての“藻採り”は、地域の人々と自然との洗練された共生関係（生物－人類複合）を生み出し、資源の持続的利用と種の多様性、地域の海域環境保全を支えるとともに地域文化にかかわりをもってきた。本年は、海藻資源の利用を伝導した遠藤吉三郎生誕140周年を記念して、藻類と人類のかかわりに論理的な基礎を与える学術研究フィールド、“民族藻類学”の新展開を目指してシンポジウム「日本人は藻類をどのように認識してきたか」を企画した。

開催日：2014年5月31日（土）
一般口頭発表：10:00～12:15
ポスター発表：13:15～13:45
企画シンポジウム：14:00～16:30
会場：東京都港区港南4-5-7
東京海洋大学品川キャンパス
楽水会館大会議室

プログラム

- 14:00～14:10 「趣旨説明:日本人と藻類」(宮田昌彦・千葉県立中央博物館)
14:15～14:50 「古典籍から見えてくる藻の文化の源流」(渡部武・元東海大学大学院)
14:55～15:30 「遠藤吉三郎が見た日本人の海藻利用」(安井肇・北海道大学大学院)
15:35～16:10 「日本人は藻類をどのように認識してきたか」
(富塚朋子・元東京大学大学院博士課程、宮田昌彦・千葉県立中央博物館)
16:10～16:30 総合討論

